

第 100 号の刊行に寄せて

岩 山 太次郎

『同志社大学英語英文学研究』第100号の刊行慶賀に存じます。

本誌には14号に論考を寄せたほか、浜田清夫（51号）、T u c k e r（59号）、齋藤勇（71号）、千葉哲郎（72号）、北垣宗治、松山信直先生らの御退職記念号に送る言葉を書いている。本号では、これまでの研究生生活を通してお世話になった方々について記して記念号に寄せる言葉としたい。

1997年にミネソタ州にあるカールトン大学から名誉学位を授与された。私と妻の郁代は同志社とカールトン大学との交流に関わってきたからたいへん嬉しかった。久しぶりに訪れたキャンパスをガウン姿で歩いたときは、妻もニコニコ顔で、頼んでいたカメラのシャッターを押すのも忘れていたほどだった。当日はカールトン大学元代表のペリオ・リッチェルらも駆けつけてくれた。ただ、カナダの大学でギリシャ哲学を教えていたケニオン大学（オハイオ州ギャンビア）のルームメイトのユダヤ系アラン・メンデルズゾーンやワシントンD. C. に住んでおられた彼のご両親はいずれも遠方のため来られなかったのは残念だった。というのは、アランとの出会いが、後年、私の重要な研究テーマのひとつとなったアメリカ・ユダヤ系文学の世界に導いたからである。妻との生活の場を探すために一足先に渡米した半年ほどの間のルームメイトであったことを思えば奇縁という外ない。

2009年秋、瑞宝重光章を受章した。11月3日、皇居豊明殿で天皇陛下にお会いした時「これまで教育に尽力され、ご苦勞でした」とのお言葉をいただいてから私の生活はさらに緊張するものとなった。

年が明けた2月21日、ホテルグランヴィア京都で、若い同僚の林以知郎氏や石塚則子氏を中心となって祝賀会を開いてくれた。

挨拶を大谷實総長、野本真也理事長、大南正瑛立命館総長からいただき八田英二学長が乾杯の労をとってくださった。スピーチを、先輩の北垣宗治名誉教授、後輩の秋田まち子校友会会長、英文学科同級生の児玉実英同志社女子大学元学長、門川大作京都市長、山本浩三元学長・名誉教授、松浦靖元施設部長、教え子の2番目の年長者である山下昇相愛女子大学教授、英文学科の同級生でゾンタ（Zonta）日本代表の安田俱子さん、京滋フルブライト同窓会会長で京都市民病院元院長の北村和人氏、同志社中学校からの同窓生中村嘉宏氏らがしてくださった。目録を学長時代の庶務係長阿知波宏氏が、花東は神戸女学院大学教授の三杉圭子さんからいただいた。彼女は神戸女学院4年次生のとき、週1回、私のユダヤ系作家のゼミに西宮からわざわざ通ってきており、大学院からは同志社へきた、いわば私のファンだった。とてもありがたいことで感激だった。

これら叙勲や名誉学位を贈られたのも、これまで私を育て研究や教育の場を与えてくれた同志社大学、文学部、英文学科、そしてそこに集う方々のお陰である。

第二次世界大戦終了後、アメリカのロックフェラー財団が東京大学、京都大学、同志社大学などにアメリカ研究のための援助金を下付してくれた。同志社では交付金六万ドルの用途について上野直蔵先生を委員長とする委員会を設け、少壮研究者をアメリカの大学に派遣することを決定した。『同志社九十年小史』には、松山信直、中条毅、高橋悠、田口芳弘、小野高治、野間俊威、笹田友三郎、森一夫、伊藤史朗、今村宏、そして、私の名前が挙がっている。私は神学部のG・G・ロイド教授の夫人ジーンさんのすすめでクリエイティブ・ライティングのできるケニオン大学へいった。

次に、助手時代にお世話になった人について書いておく。

もちろん、上野直蔵先生が第一である。

先生は戦時中もひとりで英文学科を守り、学科の全科目を担当したと自負しておられた。戦後すぐにドイツから帰国された岩倉具実氏や台北帝国大学教授の矢野禾積（かずみ・峰人）氏を教授として招いたりして英文学科の充実に努められ、後年は大学そして同志社全体の舵取りの重責を担われた。先生については*L.L.L.*の151号にも記したので、ここでは「怪物上野先生」とだけ付け加えておく。

上野先生を囲んで松山信直、北垣宗治、秋山健と私の5人で月1回研究会を料亭「なかむら」で開いていた。失礼ながら私は英文学科の人物評を冗談カルタにして秘かに楽しんでた。上野先生は「ピカッとつるつる上野先生」。松山さんは「まったく忠実（まめ）だよ松山さん」。彼については本誌65号に書いた。「アメリカ人は大体ええ加減な人間のくせに、妙に潔癖なところもあるんや。よその家のお風呂に入れてもらった後は、バス・タブはきれいに洗っとかなあかんよ」とか、親身になって教えてもらった。北垣さんについても本誌52・3合併号に書いた。どんな人との集まりでも「キャプテン」というより「ソールジャー」だった。だから「クリスチャン・ソールジャー北垣さん」である。われわれ5人での宴会でお酒がまわってすぐ横になられても、お開きとなるとガバと起きあがって会計をされた。5ヵ月とはいえ帝国海軍経理学校生徒の面目躍如であった。

もうひとりとは、「ああ言えばこう言う秋山さん」である。秋山健さんは屁理屈屋である。とても聡明で英語も上手かった。フルブライト教授で英文学科へ来ておられたフランク・ハントレイ教授が帰国するとき、自分の母校、アン・アーバーにあるミシガン大学へ連れて帰られた。思いつきもよかった秋山さんは、*THE EAST-WEST REVIEW*（年3回刊行で10号で廃刊）という英語の雑誌の刊行計画もされた。執筆も大変だったが原稿集めには骨が折れた。金関寿夫先生を通して三島由紀夫氏の推薦もあって幸いアメリカでは思った以上に好評だった。残念ながら日本では送った大学図書館からお礼状が来る程度。われわれの財力も尽きてしまった。いつも言うだけ言って何も

しなかった秋山さんの尻拭いは私以外にする者はなくて大変だった。

私たち4人の指導は厳しかった。松山、秋山、岩山と三山があって、三方塞がりだが一方だけ開いている、と思ったら「北には垣があった」と英文学科の1年次生に煙たがられていたそうである。